



TITLE:

コラボ総括円卓会議: 新しい教育関係ユニットの活動 -学校訪問、アラン・プロジェクトの取り組み-

AUTHOR(S):

永山, 智之; 西嶋, 雅樹

CITATION:

永山, 智之...[et al]. コラボ総括円卓会議: 新しい教育関係ユニットの活動 -学校訪問、アラン・プロジェクトの取り組み-. 子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして 2012, 活動報告書(2007-2011年度): 28-28

ISSUE DATE:

2012-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179748>

RIGHT:

新しい教育関係ユニットの活動 — 学校訪問、アラン・プロジェクトの取り組み —

1. 発表内容について

新しい教育関係ユニットでは、教育実践コラボレーションセンター円卓会議において、『学校現場における心理臨床的関わりについての実践的研究』という題目で、活動内容（学校訪問および『アラン・プロジェクト』）の報告を行った。

①学校訪問

まず、学校訪問では、独自の取り組みや方針を採用し、学校への適応に困難を感じている児童・生徒を多く受け入れている、『特色のある学校』への訪問を行った。その先駆けとなった洛風中学校では、現場の教職員の方々と合同事例検討会を持ち、事例を通じて教育目標や日々の実践、課題に触れ、ともに考えることができた。洛風中学校への訪問は、教職員と心理職、様々な専門家が相互に交流・連携し、学校全体で見守ることの大切さと可能性が感じられるものであった。

さらにユニットでは、各地の『特色のある学校』を訪問し、学校の持つ力とスクールカウンセラー（以下SC）の役割について検討した。そこでは、学校自体が集団を通して子どもの成長を促す人間関係を活性化する力を潜在的に持っていることがうかがわれた。そして、SCにとって、学校がどのような集団の力を持っているかを見立てることが重要であり、学校の性質を個別的に見立てる中で、その学校の中で何ができるかを検討する視点が必要となることが示唆された。さらにその際、SCには集団の力を信じた関わりと集団の限界を知る視点の両方が大切になると考えられた。

②『アラン・プロジェクト』

次に、『アラン・プロジェクト』では、スイス、チューリッヒ教育大学のアラン・グッゲンビュール教授が考案した『ミソドラマ』という新しい手法を、日本の学級で実施した。ミソドラマでは、物語を用いた間接的な手法を用いることによって、子どもたちが自分の葛藤や悩み、あるいは、その解決法への示唆などを表現しやすくなり、また、そうした表現が、教師が生徒の問題を理解する手がかりになり得ると考えられている。今回、ミソドラマが学級に直接的な影響を与えたとは一概に言えないが、子どもたちの持つエネルギーが活性化され、学級の変化につながるきっかけになったとも考えられた。加えて、クラス集団の持っているテーマが明確になり、教師や生徒を含めたクラス内で課題となるテーマが言語化され、意識化されたことも、成果の1つとして考えられた。



▶セッションの様子

2. 参加者からのコメントと考察

桑原教授からは、有能性と生命性をどのように両立させていくのかということを考えるにあたって、一般論ではなく、個別性に対応することが大切であり、そのために現場に行き、具体的に実践をして

いくことが重要であることが語られた。さらに、人と接する時に、客観的に分析をするのではなく、その人の身になって考えていくことや、関係性を視野に入れ、関係の中に身を置いてみることの重要性が述べられた。今回の学校訪問および『アラン・プロジェクト』は、各地の学校や学級に赴き、現場で生徒や教職員の方々と関係に身を置く中で浮かび上がってきた、それぞれの学校ないし学級集団に個別の力や課題を生徒や先生方と共有し、新たな気づきや変化が生まれる契機となった点で有意義であったと言えるだろう。

また、前述の発表内容と関連して、洛風中学校の須崎校長からは、洛風中学校においても“仲間とともに”ということの大切さが実践の中で裏付けられていったことや、集団の限界も視野に入れつつ、生徒も教師も“無理をしないで、頑張る”ことが重要であることが述べられた。集団の限界を視野に入れることは、個々の生徒や教職員の限界、ひいては仲間の存在自体を尊重することともつながり、そのことが集団、さらには個人の力を賦活する土台となると考えられるだろう。さらに須崎校長は、“今の子ども達は、共感性が持ちにくく、分かり合おうということがなかなか難しいので、体験の中で、今ここに起きていることはどのようなことなのかということを一緒に考えている”ということを話された。今後、こうした生徒のあり方を踏まえ、生徒に仲間体験を持ってもらう機会を作りながら、どのような形で集団の力を賦活し、また限界を見立てていくかについて、実際に現場での実践を通して吟味していくことが求められる。

今回、学校訪問を通して、教職員が学校の持つ集団の力を賦活し、心理職がそれを補償し、支えるという、学校における教職員と心理職の連携のあり方の重要性を具体的な実践例から見出し、それらの実践例における連携のあり方から今後の方向性に関する示唆を得たことが、成果として強調できるだろう。さらに連携の際には、『アラン・プロジェクト』のように、心理職が教師と共に学級集団そのものに働きかけていき、生徒に集団活動を体験してもらうことも、今後心理職が学校の集団の力を支えるために求められる役割の1つになるのではないだろうか。

我々の世代の心理臨床家の訓練過程においては、SCを始めとした心理職が学校現場に配置されていることが当たり前のこととして扱われることが多い。しかし、そのことの自明性自体を問い、「SC（心理職）はどのような意味において必要なのか」「学校が本来持っている発達促進的な意味は何か」という視点から改めて検討を行ってきた。これらの問いに答えたことに、一連の調査研究の意義があったと言える。

3. おわりに

現在、ミソドラマを学校の教職員の方々に実施していただけるように、ハンドブックの準備を進めている。今後も教職員の方々と心理職、さまざまな専門家が連携して、よりよい学校のあり方を模索していくことが望まれる。

（文責：永山 智之・西嶋 雅樹）